

中

(十九)

大

里

介

山

菩

薩

峠

京の夢おう坂の夢の巻

時代小説文庫

時代小説文庫 19

大菩薩峠 (十九) 京の夢おう坂の夢の巻 全二十冊

昭和五十七年九月二十日 初版発行

著 者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 旭印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600119-7440(0)

時代小説文庫

19



富士見書房

大菩薩峠

(十九)

京の夢おう坂の夢の巻 中里介山

目次

京の夢おう坂の夢の巻

七

山科の巻

二九四

「大菩薩峠」装幀の由来

横尾 忠則 四六

大菩薩峠

(十九)

京の夢
おう坂の夢
の巻

京の夢おう坂の夢の巻

一

同じその宵のこと、おおつ大津の浜から八十石の丸船をよそおいして、こつそりと湖中へ向かって船出をした甲板の上に毛氈もうせんを敷いて酒肴しゅこうを置き、上座に構えているその人は、有野村の藤原の伊太夫で、その傍に寄り添うようにして、

「御前様ごぜんさま、光悦屋敷こうえつやしきとやらのことは、もう一ぺんよくお考えあそばしませ、大谷風呂おおたにぶろのほうは、どちらへ転びましても結構でございますがねえ」

それは女輕業おんなかるわざの親方のお角かくでした。

女輕業の親方お角さんは、今では伊太夫第一のお氣に入りになっている。お角が伊太夫を御前様と称よなえてみたところで、あえてへつらうわけではない。伊太夫は伊太夫としての貫禄から言っても、その系統から言っても、大名以上の実力はあるのだから、可笑おかしいことにはならないのだし、お角もまた、この人を御前様以上の御前様として心からの尊敬を以て言うのだから、それも

昭和十四年十一月執筆

可笑しいことにはならない。伊太夫は軽くなずいて、

「それは、どちらでもいい」

と答えました。そうすると、同じ取巻きの町人体なのが引きついで、

「いや、山科やましなの光悦屋敷のほうも、ぜひお引き取りなさいませ、今の御時世でございませんと、寝かしておきましても、持ち主がちよと手放す気にはなれませぬ、あれだけの由緒あるお屋敷は、さがし求めた日には、なかなか出物でものがあるわけのものではございませぬ、万一売主がございまして、買い切れる主がございませぬ、買いたいと申しまして、二度と売主は出ますまいかと存じまする、お大尽のお耳に入りましたのが、全く以て千載一遇——売主のためにも、お買取りの方にも、また古いにしえの光悦様のためにも、三方への功德くどくになるかと心得ておりまする」

おたいこを叩いている言葉尻から察すると、この辺に地所の買入れの周旋が相当進んでいるらしい。

しかし、今晚は、そういうことの取引を熟談するために、この船をよそおうて湖へ出たのではないらしい。そうかと言って、今晚に限って、湖上の月を眺めようとの風流のための一座でないこともわかっている。地所家屋のことが口に上ったのは、当座の口合いだけのもので、この船は別に何か目的あって沖に向かつて進むものらしい。

宿へは、月も見がてら、夜をこめて、竹生島ちくぶじままで行きつき、泊りの参詣さんけいをして帰ると言っていたのですが、その竹生島参詣にしてからが、何も今晚、この船路を選ばなければならぬ必要も、理由もないようなのですが、それを伊太夫の発意によって、急にこの船よそおいをさせたとい

うものは、一つは湖中へ向かって、陸上から避難の意味でありました。

避難といえ、今の伊太夫の身边に何か急に迫る危険が予想されたのか、というに、急にそうあるべき事情もないことは、わかっている。そもそも伊太夫、今日の旅路というものが、極めて微行しのびの形式で、関西の名所めぐりということになっているが、その実は、やっぱりあの胆吹山いぶきやまの麓ふもとに根を張っている、やんちゃ娘の女王様の動静が、さすがに親心で気にかかる。それを見届けるがための旅立ちということが、内心の主力を占めているのですから、まだ、当分は、胆吹と相望むところのこちらの湖岸を離れることにはなるまいと思われる。お角親方にしたところが、このお大尽に付き添うていることの限りにおいては、あえて、そう京阪地方に一日を争わなければならぬ兼合かねあいはないものと見なければならぬ。

悠揚として、迫ることの必要のない伊太夫が、今晚避難の意味を兼ねて湖中に出でたということは、どうも表面見ただけでは、その内情を察するに難い。さては、あのが、ん、り、き、の百とやらの小盗人奴ぬすつとめに覘ねらわれて、つき纏まとわれる煩わしさからのがれようためか、まさか、藤原の伊太夫ともあるものが、タカの知れたゴマの蠅はえ一匹の為に、陸上に身の置きどころがないという解釈も、あまりに浅ましい。

実のところ、伊太夫の怖れを成したのは、この前から度々、隠見する湖上湖岸の物騒なる空気の動揺が然しかあらしめたもので、これが伊太夫の心持をも少なからず動揺させてしまいました。湖南北を通じて、すさまじい百姓一揆いっき勃発ぼつぱつの気運が、今やハチ切れんばかりに胎動している、いや胎動ではない、もはや、宿々領々によっては爆発の暴動を上げてしまっている。それが伊太夫

の心を常ならず不安にしました。

持てる人としての伊太夫は、他の何事にも驚かぬことの代りに、持たぬ者どもの動静に神経が過敏となる。伊太夫はしかるべき家に生まれて、しかるべきように今日まで来ているから、あえて力を以て、暴圧と、搾取とを、持たぬ者どもに加えた覚えはないのだから、モップの恨みを買うべき事情は少しも備えていないとは言いながら、持たぬ者どもが動揺をはじめたときは、その波動が、いつ何処にしようとも、誰人にも増して身にこたえるのは、持てる人の身にならなければわからない。

湖岸暴動の風聞を聞くにつけて、伊太夫はいやな気になって、それで急に、船よそおいをさせて、竹生島詣もようでを口実の水上避難という次第でありました。

二

「おやおや、何か変なものが流れて来ますねえ」

ややあって、お角さんが湖上をながめてこう言いました。

「あれご覧なさい、あれはまだ新しい盃さかずきと台盤——まあ、こちらの方から、女の帯が流れて来ますよう」

盃と台盤と言っていた間は、まだいいが、女の帯と言われて、一座がゾッとしました。

盃盤はいばんの流れたということは、いささか風流の響きもあるが、女の帯が流れたということに、何か一座の身の毛をよだてるような暗示が有ったらしい。そうして湖面を見て、その言うとおりの

酒器しゆきが浮かび来ることは誰もそれを見たが、女の帯が流れているということを、舟の上の誰もが、まだ気がつかない。酒器は水に浮かぶものだが、女の帯は必ずしも水に浮いて流れるとは限らない。帯によっては水に沈みがちでなければならぬのを、眼ざとく、その一端を見つけて、帯、しかも女の帯と認定してしまったそれは、お角さんの勘と言わなければならない。

そこで、一座は、お角さんの勘を基調として一同に身の毛をよだてたのですが、帯を帯として認め得た者は、お角さんの外には一人もありませんでした。

だが、そう言われて見ると、一筋ひとすじの女の帯が暢揚ちやうようとして丈たけを延ばして、眼前に腹ばって、のしに行く。さきに流れた、誰にも認められるべきところの酒器台盤がそれに先行して行く。見ようによると、一匹の大蛇が、その酒器台盤を追うて、これを吞まんとして吞み得ざるままに、追走してのしに行く形に見えて、一層物すごくなったのです。

一座は無言で、ゾツとしたままで、その酒器を追う平面毒龍へいめんどくりゆうの形を見入ったまま、水を打ったように静寂に返りました。

そうすると、しばらくあって、その毒龍の尾について、間隔は二三間を隔てて、濫觴らんしようのような形のもものが二つ、あとになり、先になり、前なるは振り向いて後ろなるを誘うが如く、後ろなるが先んじて前なるものに戯るるが如く、流れ流れて行くものを認めないわけにはいきません。

「あれはポックリです——女物の、二十歳はたち前の女の子でなければはきません」

噉かんで吐き出すようにお角さんが言う。それが一層のまた凄味すこみを物言わぬ一座の上に漂わせた
とみえて、ちよつと目を外そらす者さえあったが、憑つかれたように、その行く手を見据えているも

のも多かったです。

湖上はと見れば、その時、立てこめた一面の霧です。

行く手も霧、返るさも霧、ただその霧が明るいことだけは、霧の上に月がある余徳なのであって、この霧の中を迷わずに進み得るのは、船頭そのものの手練である。ところが、その多年の船頭そのものの手腕が怪しくなったとみえて、

「な、な、なんて、だらしのねえ船扱いだ、おいおい何とかしなければ、正面衝突だよ、舟と舟とが、まともにぶつつかるよ、おい、その舟にや舟夫がいねえのか」

こちらの船頭が舟の舳先で、あわただしくこう叫んだのが、また一座の沈黙の空気を脅やかししました。

今までは静かに漂うものの無気味さに打たれていたのですが、今度は、さし当り此方にのしかかって来るものがあるらしい。その警戒のためにとて、こちらの船の舟夫が、あわただしいこの警告です。見ればなるほど、一隻の舟がこちらに向かつて、正面衝突の形で、前面より突き進んで来つつある。こちらの船頭が叫ぶのも無理はない、あのままで来れば当しく正面衝突です。しかし、正面衝突とすれば、その危険性は我になくしてむしろ彼にあるのです。何となれば、彼の舟はこの船に比べて遥かに小さいから、正面衝突の場合の損傷を論ずるといふ日になると、まるで比較にならない。

そこで、こちらの船頭の警告というものは、むしろ我の危険のためにあらずして、彼の危険のための忠告の好意ある叫喚に過ぎないのだが、その好意を好意と受け取らないのが、先方の舟の

行き方であつて、そういう危険状態が目睫に迫っているにかかわらず、あえて警告に応じて、舟の針路を転向しようとも、変換させようとも試みないで、霧の中を出て、霧の中を平気で漂うがままに、あえて正面衝突も、木葉微塵も辞することなき、無謀千万の行き方でやって来るもので、すから、こちらの船頭が、火のついたように地団太を踏んで、

「あ、あ、いけねえ、何とか楫を取れねえのか——」

先方は小舟だけに操縦が容易である、こちらは大船だけに運用が自由にならぬ、避けようとすれば先方は、ほんの一挙手の労で済むのだが、それをそうしないために、こちらの船頭は倍級の狼狽をしなければならぬ、それでも多年の熟練でようやく方向変換が出来て、正面衝突だけは避けられたが、その途端に、棹をやつて邪慳に相手方の小舟を突き放してみると、そこにも手ごたえがなく、すんなりと放れる。

「なあんだ、空っ舟だ——」

相手がありさえすればこの場合、舟の衝突は免れても、舟夫同士に相当の口論、腕立てが起るべきところを、相手が人なし舟では喧嘩にならぬ。乗る人がなくて霧の中からさまよい出て来て、突き放さるればまた文句なしに突き放されてゆく小舟を、船頭は腕のやり場もなく、しばらく見ていたが、それを見のがしにしまったのが、お角さんです。

「舟夫さん、ちょいと、その舟を留めてみて頂戴、こっちへ引き寄せて見せてもらうわけにはいかないかねえ」

お角さんだけが、この人なし舟を、人なし舟として突き放しにする気にならなかったのは、何

かこの女の勘にさわるものがあつたればでしょう。勘というのは、弁信法師に限ったわけではない。脳味噌の働きの利鈍によって、何人にも勘の能力の大小がある。弁信法師の如きは超人的で、それは何者にも比較にならないが、お角さんの如きは、女性としては最も勘のすぐれたほうの女性なのです。目から鼻へ抜ける勘持ちで、いわゆるこらえぬ氣象なのです。ただ、勘という字が、お角さんの場合においては「疳」とか「癩」とかいう字を使ったほうが適切な場合が多かろうというものです。

癩走るお角さんの命令によって、船頭は二言ともなく、一旦突き放した小舟を、また自分たちの大船の船べり近く引き寄せて、生かそうと殺そうと御意のまま、という体で、お角さんの眼前へ突きつけたものです。

三

幾つもの提灯ちようちんをさげつつ、この引き寄せられた舟の中へ入り込んでみたのは、お角さんをはじめ、伊太夫周囲の取巻き連でありました。お角さんを見ると、この小舟の中が狼藉ろうぜきを極めておりました。

外の者が見たのでは、何が何やら気ぜわしいばかりです。

そこで、お角さんが、

「ちえッ」

と舌打ちをして、眉根まゆねに八の字を寄せながら、舟底ふなぞこをちよつと蹴立けだててみたというものは、そ

の狼藉ぶりが例の癩にさわったからでありましょう。

他の者が見ては、特に目立たない場合に、ナゼお角さんだけが、その狼藉ぶりに癩を鳴らしたかと見れば、小舟の中が、あまりに見苦しい取り散らかしぶりであつたからです。

「何て、たしなみのないザマなんでしょう」

お角さんは、小舟の中を見て眼をそむけてしまったが、改めて大船の上を見上げる。燈籠の下座に席をくずさずに坐っている伊太夫も、何となく、こちらが気がかりのように、見おろしている様子にぶつつかると、そのままにしておいて、

「さあ、上りましょう、これだけのものなんです、でも、船頭さん、この舟を曳いて行ってあげて下さいよ——しかるべきところまでねえ」

狼藉は狼藉としてのままで、一応引くところまで引いて行って調べてやろう、というお角さんの腹です。

その声に应じて、提灯片手の取巻き連が、一応もとの席に戻りますと、右の小舟は無雑作に曳き舟として扱われて、無意味従順にこの親船のあとに引かれて行く。

「何でした、別に危険いこともなかったですかね」

伊太夫から、たずねられてお角さんが少し息をはずませ、

「ちょきが一ぱい流れついただけのことなんですがね、御前様、どうも、その中が穏やかでないでございますよ」

「どう、穏やかでないのですか」